

# 脱焦点化のパラドクス\*

赤羽仁志

## 1. はじめに

現代英語においては「主語-動詞-目的語-X(PP など)」が基本語順となるが、談話における情報構造を反映してこの語順にはしばしば変更が加えられる。(1)のように話題要素を文頭へ移動させる話題化はその代表的なものである(以下、 $t_i$ は音声的に消去された移動のコピーと解されたい)。

- (1) This film<sub>i</sub> I really hate  $t_i$ .

線形順序上、旧情報あるいは前提的な要素が文頭に現れることをこの文はよく表している。逆に新情報あるいは焦点要素は文末に置かれるのが言語一般的な原則である。本論文では文末に現れる新情報に相当する焦点を É. Kiss(1998)や Horvath(2000)に従い「情報焦点(information focus)」と呼ぶことにし、強調アクセントを伴い文末以外にも生じる「同定焦点(identificational focus)」などと区別をするが<sup>1</sup>、全体を通して前者が議論の中心となるため、特に断らない限り単に焦点と言う場合には情報焦点を指す。

文末への移動については後置と総称されることがあるが、この移動の結果は、英語では常に情報構造を反映するとは限らない。このことは基本語順(2a)を(2b)に変換する Ross(1967)の言う「重名詞句移動」の例からも明らかである。

- (2) a. Max put [<sub>DP</sub> all the boxes of home furnishings] in his car.  
b. Max put in his car [<sub>DP</sub> all the boxes of home furnishings].

重名詞句の名の通り、音韻的に重い DP でなければこのような文末への転移は許されない(音韻的な重さは純粋にその音節数だけでは判断できず、強調アクセントなども考慮に入れなければならない)。したがって、目的語がそのような意味において重名詞句である場合を除き、(3a)から(3c)へのような変換は、目的語が焦点であるとしても、排除される。

- (3) a. Max put [<sub>DP</sub> a box] in his car.

- b. Max put in his car [<sub>DP</sub> a BOX].
- c. \*Max put in his car [<sub>DP</sub> a box].

Larson(1989)は重名詞句移動が右方移動ではなく、むしろ重名詞句を文末に置き去りにする V(′)の左方移動であると分析し直している。が、何れにせよ、英語の重名詞句移動は、Zubizarreta(1998)が指摘するように、焦点を文末に配置するような操作ではないであろう。

英語と異なり、焦点が文末に生起するように語順を変更することが必要な言語がある。スペイン語やイタリア語などがその例であるが、これらの言語では目的語 DP が焦点であれば(3a)に対応する語順は許容されず、(3c)に対応する語順に変換される。このような変換は、Zubizarreta(1998)や López(2009)によれば、非焦点要素の VP/vP 極辺への左方移動であり、言わば「脱焦点化(defocusing)」の結果を生み出す移動と見做せる。スペイン語/イタリア語ではこのような移動により文末に焦点を配置するのであるが、英語ではそのようなことはない。これについて Zubizarreta は、英語では文末の非焦点要素を韻律的に不可視とすることが可能なため、移動を介すことなく焦点要素を文末に配置できるとしている。しかし、英語ではなぜそのようなことが可能で、スペイン語/イタリア語では不可能なのか根本的理由が与えられていない。よって、英語で脱焦点化に関与する移動が無いように見えることについては謎のままである。

本論文ではこのような問題について、ミニマリスト・プログラムの Chomsky(2000)以降の枠組み(フェイズ理論)により説明を試みる。特に Chomsky(2013)の標示(投射)に関する提案を応用しながら、脱焦点化に関するスペイン語/イタリア語と英語での(見掛け上の)移動の有無について分析を加える。また、脱焦点化についてだけでなく、その説明の副産物として、焦点に関わる他の現象についても考察する。本論文の構成は次の通りである。2節でまず、Zubizarreta(1998)の分析を中心に振り返り、フェイズ理論を用いて脱焦点化に関わる移動を捉え直す。スペイン語/イタリア語と英語の相違を説明するため、3節では Chomsky(2013)の標示のシステムを導入する。また、Rizzi(2010)の「規準凍結(criterial freezing)」を取り入れ且つパラメタ化することを提案する。これによって、非焦点要素を韻律的に不可視とすることなく焦点解釈と線形順序の対応関係が説明される。4節では、フェイズを成す構成素について再検討し、CPと vP<sup>2</sup>だけでなく vP を直ぐ支配する VoiceP もフェイズとする。5節では、それまでに議論した英語の脱焦点化移動と見掛け上、矛盾しているとも思える提示の *there* 構文について論じ、その含意についても触れる。6節は残される問題として、文頭の

主語位置における焦点要素の生起について若干の議論を加える。7節は結論である。

## 2. 脱焦点化移動

スペイン語／イタリア語などでは常に焦点要素が文末に置かれるため、基底において文末を非焦点要素が占める場合、焦点が文末に現れるよう、脱焦点化の移動が適用される。焦点が文末に位置することは英語にも当てはまるのであるが、それと矛盾する事例も存在する。つまり、英語においては脱焦点化に関わる移動が欠如しているように見えるのである。それについて論じる前に、スペイン語／イタリア語における脱焦点化の移動に関し、Zubizarreta(1998)の分析を振り返り、それに対する修正を加えることにする。

スペイン語とイタリア語における脱焦点化の移動の例をそれぞれ(4)と(5)としてZubizarreta(1998)から引用する。

- (4) a. \**María puso el libro sobre la mesa.* (スペイン語)

*María put the book on the table*

- b. *María puso [sobre la mesa]<sub>i</sub> el libro *t<sub>i</sub>.**

(≈ (4a))

- (5) a. \**Maria ha messo il libro sul tavolo.* (イタリア語)

*Maria has put the book on the table*

- b. *Maria ha messo [sul tavolo]<sub>i</sub> il libro *t<sub>i</sub>.**

(≈ (5a))

(4)-(5)で下線が施された語には文の核強勢が置かれ、その語を含む句が焦点となる(以下、この表記法を用いる)。つまり、目的語 *el libro/il libro* が焦点ということになるが、それらが文末に置かれない(4a)/(5a)は非文となる。Zubizarretaによれば、ロマンス語における文の核強勢は(6)のような構成素駆動核強勢規則(C-NSR)に基づいて付与される。

- (6) Constituent-Driven Nuclear Stress Rule (C-NSR)<sup>3</sup>:

Given two sister categories  $C_i$  and  $C_j$ , the one lower in the asymmetric c-command ordering is more prominent.

非対称的なC-統御階層において、より低い位置にある要素ほど韻律上より卓越的で

ある。文末要素がC-統御階層において最も低い位置を占めるのであれば(cf. Kayne (1994))、文末要素が強勢において最も卓越することになる。Zubizarreta は、また、焦点となるべき要素が統語構造上で適正に配置されているかを判断するのに、C-NSR と相互作用するように適用される(7)の焦点卓越規則(FPR)を提案している。

(7) Focus Prominence Rule (FPR):

Given two sister categories  $C_i$  (marked [+F(ocused)]) and  $C_j$  (marked [-F]),  $C_i$  is more prominent than  $C_j$ .

[+F]が付与され焦点と解釈されるべき要素は、そうでない([-F]を付与された)要素より韻律的に卓越していなければならない。(4a)/(5a)において、FPRからは、[+F]が付与されていることが意図される *el libro/il libro* が[-F]が意図されている *sobre la mesa/sul tavolo* より韻律的に卓越していなければならない。C-NSRからは、正反対に、C-統御階層において低い位置を占める *sobre la mesa/sul tavolo* が高い位置を占める *el libro/il libro* より韻律的に卓越していなければならない。よって、全く不整合な状況が生じる。その状況を回避するため、(4b)/(5b)でのようにC-統御階層を変更する移動が適用され、結果として適格な文が得られる。

Zubizarreta は、(4b)/(5b)での移動はVPへの付加であると分析する。

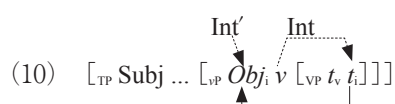
(8) [<sub>TP</sub> María<sub>i</sub> puso [<sub>VP</sub> [sobre la mesa]<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>j</sub> [el libro t<sub>i</sub> t<sub>j</sub>]]]] (= (4b))

脱焦点化を伴うこのような移動を Zubizarreta(1998)は韻律的に動機付けられた移動(p-movement)であるとした。核強勢位置である文末と焦点の位置とが一致しないとき、非焦点要素の動詞前位置への移動が引き起こされるからである。しかし、López (2009)が指摘するように、実際にはこのような移動が韻律上の理由により駆動されているのではないことは次のような例で確認可能と思われる。

- (9) a. Le di a mi hermana dos pimientos para mi madre.  
 cl.dat gave.lsg dat my sister two peppers for my mother  
 'I gave my sister two peppers for my mother.'  
 b. Le di [dos pimientos]<sub>i</sub> a mi hermana t<sub>i</sub> para mi madre.

(9a, b)の何れにおいても、焦点となる (para mi) madre が文末の核強勢位置に現れている。したがって、問題の移動によって解消されるべき C-NSR と FPR との間の不一致は生じていない。

(8)に示されるように非焦点要素が焦点要素の現れる領域から抽出され VP (vP)の極辺へ移動されるのは、丁度、Chomsky (2001)における北欧語の目的語移動 (object shift)の分析と共通する。Chomsky によれば、主要部 v に EPP 素性 (Chomsky (2008)での極辺素性 (edge feature)) を付与することによって目的語は vP フェイズ極辺へ移動する。これにより、目的語は (10) のように v からその C-統御領域に対して行われる Int (erpretation) 素性の付与を免れ、代わりに Int' 素性が付与される。



Int は焦点に関する意味素性のため、付与された要素は焦点となる。逆に、Int と相補関係にある Int' が付与された場合には前提解釈が与えられるため、脱焦点化されたということに等しい。

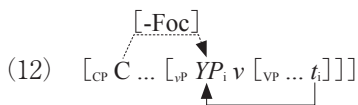
Chomsky のフェイズ理論におけるこの目的語移動の分析は北欧語だけでなく他の言語にも適用され、López (2009) においてはロマンス諸語に見られる (4b)/(5b) でのような移動に応用がされている。López は、この移動が vP フェイズにおける指定部・主要部関係を介した形式素性の照合のために駆動され、また、vP 指定部を占めるという構造的な位置付けそれのみにより [+a(naphor)] 素性 (Chomsky の Int') が与えられ、前提的な解釈が得られると主張している。

López の分析にも問題が無いわけではない。例えば「フェイズ」の概念が用いられではいるが、vP 指定部に移動してきた要素が探査子となり、本来探査子として機能しているはずの主要部 v を目標子として一致を行うとしている点は、フェイズ理論の一致についての考え方と相容れないように思われる。更に、問題となる移動についてフェイズ理論からの動機付けを与えるのならば、単に vP 指定部を占めるということ以上に、v の C-統御領域内から脱出して vP 極辺へ移動されたことがもたらす効果がむしろ重要性を持つと思われる。vP 極辺まで抽出がされていれば、フェイズ不可侵性条件 (Phase Impenetrability Condition/PIC) に基づき、その外側に出現する CP フェイズ主要部 C から一致を受けることが可能となる。ここでは PIC の定義を次のように仮定しておく。

(11) フェイズ  $\alpha$  は、その極辺を除き、 $\alpha$  の外部にある要素から接近不可能である。ただし、 $\alpha$  は CP または vP で、極辺はその指定部および主要部とする。

なお、(11)で「指定部」という用語を用いているが、従来のような概念そのものは既に存在しておらず、Chomsky(2013)では単に主要部への2回目(以降)の併合としか見做していない。この点では補部と概念的に区別されるものではない。本論文でも指定部という用語を説明の便宜のために使用する。

(10)では、 $v$  の C-統御領域内に Int が付与され、その外部では Int' が付与されたが、Int をより具体的に [+Foc(us)]、Int' を [-Foc] と呼ぶことにする。[+Foc] は vP フェイズ主要部  $v$  が探査子となって  $v$  自身の解釈不可能素性に関し一致を行った結果、目標子の持つ値未指定の解釈可能素性 [uFoc] に値付与がされたものとする(ただし、4節で修正がされる)。全く同様な仕方で、[-Foc] は CP フェイズ主要部 C が探査子となって C 自身の解釈不可能素性に関し一致を行った結果、目標子の [uFoc] の値付与を行ったものとし、[-Foc] は同時に複数の目標子と一致できると考える。[+Foc] と [-Foc] の何れの素性値付与も PIC の制約を受ける。[uFoc] が負の値を付与されるには、目標子となるものが少なくとも vP フェイズ極辺まで到達していなければならない(これについても4節で修正を行う)。[-Foc] が付与される仕組みを図示すれば(12)のようになる。



PICにより、焦点でない要素が前提的な解釈を得るために行う移動、つまり、脱焦点化移動の着地点が予測可能となり、また、VP内に残留した要素がCとでなく  $v$  と一致をし、文末に焦点要素として現れることが捉えられる。このようにして、スペイン語/イタリア語等において基底で文末を非焦点要素が占める場合、文末に焦点が現れるよう脱焦点化移動が適用され、焦点要素の現れる位置が統語的に調整される。詳細は5節になるが、同様のことは主語が焦点と解される場合にも当てはめられると思われる((13b)/(14b)では主語のみを残して全て vP 外へ取り出される)。

(13) a. \*Juan comió una manzana. (スペイン語)

Juan ate an apple

'Juan ate an apple.'

- b. Comió una manzana Juan.  
 (≈ (13a))
- (14) a. \*Gianni ha mangiato una mela. (イタリア語)  
 Gianni has eaten an apple  
 ‘Gianni ate an apple.’
- b. ?Ha mangiato una mela Gianni.  
 (≈ (14a))

スペイン語／イタリア語では脱焦点化移動により非焦点要素を文末でない位置へ配置転換した。ところが、英語については(4a)/(5a)に対応する語順が不適格とならない。焦点が文末に現れるのが一般的であるとすると、明らかにそれとは矛盾する。英語に脱焦点化移動が欠如しているとも考えられるが、それに関連して Zubizarreta (1998) はスペイン語(／イタリア)と英語(／ドイツ語)の違いを次のような仮説により説明する。

- (15) a. All phonological material is metrically visible for the NSR in Spanish.  
 b. Defocused and anaphoric constituents are metrically invisible for the NSR in English and in German.<sup>4</sup>

スペイン語では文中の要素で音形があれば全て韻律的に可視的であるのに対し、英語では非焦点要素は照応形と共に韻律的に不可視のものとして無視できる。もし、脱焦点化移動を駆動する要因が Zubizarreta の言うように韻律的なものであるとするならば、文末の要素が無視できる場合、脱焦点化移動による調整も不要となる。しかし、López(2009)の言うように、脱焦点化移動を駆動する要因が韻律的なものでなければ、英語で、なぜ、(15b)のような方策が取れるのか明らかでない。そこで、このような英語の一見矛盾とも思われる非焦点要素の振る舞いについて次節で考察を加えることにする。

### 3. 標示

脱焦点化の矛盾の議論のため、まず、Chomsky(2013)で提案されている投射あるいは標示のメカニズムを導入したい。いわゆる拡大標準理論を踏襲、改訂したモデルにおいては、文の構造に組み込まれる各投射は必ず何らかの範疇標示を持ち、それが(16)のような X 式型から逸脱するようなものであれば排除されると仮定されてきた。

- (16) a.  $X' = X X''^*$   
 b.  $X'' = X''^* X'$

しかし、文の派生が「併合」という2項的演算によって行われる現行のミニマリスト・プログラムにおいては、そのような範疇標示が不要である可能性がCollins(2002)等によって指摘されている。併合適用の際、この演算に参加する2者のうち一方が他方を選択する主要部になり、結果として得られる統語構築物(syntactic object/SO)の標示は(17)のように主要部側のそれを継承することが必然的である。

- (17)  $\alpha + \beta \rightarrow \{\alpha, \beta\} = \alpha$

これは、従来、 $X'$ 式型で捉えられてきた内心性に他ならず、その意味で独立した $X'$ 式型を仮定する必要は無く、その中で用いられた範疇標示それ自体も不要である。

Chomsky(2013)もこのような可能性を認めているが、標示は概念・意味(conceptual-intentional/C-I)機構における解釈のために必要な情報であるとする。そのため、もしSOに標示が為されていなければ、解釈が与えられないものとして排除されることになる。Chomskyによれば、標示は派生の過程において、C-I機構への転送時までにフェイズ毎に適用される演算であるとされる。標示の適用は、併合によってSOを構成する $\alpha$ と $\beta$ の何れか一方のみが主要部と判断される場合に限られるが、簡単にはSOの中で最も埋め込みの浅い語彙項目をSO全体の主要部とし、その語彙項目をSOの標示とする。便宜的に、主要部の条件を(18)のように定義しておく。

- (18) SO =  $\{\alpha, \beta\}$  の標示のために $\alpha$ が主要部と判断されるためには、 $\alpha$ のみが単一のメンバーから成っている単集合と見做されなければならない。

例として、動詞句 $vP$ の標示について(19)-(20)を見よう。

- (19) There [<sub>so</sub> arose some problems].  
 (20) That guy [<sub>so</sub> solved the problem].

(19)のSOは非対格動詞句であり、厳密には $\{v, VP\}$ という集合である。 $v$ はそれ自身のみから成る単集合であるのに対してVPは2項から成る集合 $\{arise, some\ problems\}$ であり、また、 $v$ は[V]素性を含む語彙項目を補部選択することから、併合によって



出来上がる SO は転送時に  $vP$  と標示されることは自明である。(20)の SO は他動詞句であるが、その標示については(19)ほど自明でない。(20)の SO は  $\{v, VP\}$  ではなく  $\{DP_{EA}, vP\}$  である。 $DP_{EA}$  は外項の *that guy* であり、単集合ではない。併合相手である  $vP (= \{v, VP\})$  も単集合ではないので、主要部が存在しないことになる。したがって、(20)では述語となるはずの SO が如何なる標示もされないため、C-I 機構において意味的に述語を欠き適正な解釈が与えられない。よって(20)は非文と予測されるが、これは事実ではない。Chomsky はこの矛盾について、Moro(2000)の動的対称性<sup>5</sup>の基本的な考え方を取り入れ、次のような解決策を提案している。(20)の  $DP_{EA}$  は、基底においては併合した  $vP$  と言わば対称的な関係となっているため何れも主要部とならない。が、前者は最終段階まで基底位置に留まらず表層の主語位置へ移動する。移動は一般に音形を持たないコピーを基底位置に残すが、移動のコピーはその後の統語計算にとって不可視的である。これにより、(20)の SO は  $\{DP_{EA}, vP\}$  ではなく  $\{vP\}$  となり、問題なく標示が為される。

(20)では外項が基底位置から抜け出すことにより  $vP$  の標示が可能となることを見た。これに加え、Chomsky は Alexiadou and Anagnostopoulou(2001)を引用しながら、内項が基底位置から抜け出すことによっても  $vP$  の標示が可能になるとしている。前提として(英語の)V は  $v$  へ主要部移動する。それと平行するように内項 IA が VP から抜き出されると、次のような構造が生じる。

(21) ... [<sub>VP</sub> V-v [<sub>VP</sub>  $t_v$   $t_{IA}$ ]]

(21)に示されるように、VP 内には計算機構にとって不可視的な要素  $t_v$  と  $t_{IA}$  だけが残る。また、主要部移動(付加)の産物 V-v は、その形成が集合併合によらず対併合によるため、SO としては  $\{V, v\}$  でなく  $\langle V, v \rangle$  である。付加された要素は SO の標示に参与する集合のメンバーとならないので、外項の併合相手である  $vP$  は  $v$  のみの単集合と見做される。

以上のような派生の仕組みを前提にしながら、脱焦点化移動に関するスペイン語と英語の違いについて再検討していく。まず、前節で見たスペイン語の例を再録しよう。

(22) a. \**María puso* [<sub>VP</sub>  $t_v$  [<sub>VP</sub> *el libro*  $t_v$  *sobre la mesa*]]. (= (4a))

*María put the book on the table*

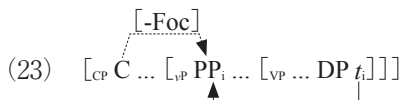
b. *María puso* [<sub>VP</sub> *sobre la mesa*<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> *el libro*  $t_i$ ]]. (= (4b))

(≈ (22a))

基本語順を取る(22a)は、意図されている焦点解釈と矛盾する。それを解消するように、(22b)ではPP(*sobre la mesa*)がvP極辺に移動している。そのとき問題となるのは、PPが移動により内部併合してSO = {PP, vP}を形成した(まだvPからvが抜き出されていない)段階で、このSOの標示がP(P)とv(P)の何れを継承するか判明しないということである。vPは述語の機能を果たすので、C-I機構にとっては標示が為されることが必要である。また、vPは機能範疇T(次節では別の機能範疇を仮定する)に外部併合するが、vPの標示が無ければそれは適正な補部として外部併合されない可能性がある。

Chomsky(2013)では、主語・述語関係を成す2つのSO、NP(DP)とTPが併合して出来上がるOS( $\alpha$ )について、その標示はNP, TP両者が共通して持つ主要な素性を当てるとしている<sup>6</sup>。Chomskyは当該の素性が $\phi$ 素性であるとしているが、(22b)で問題となるSOはTPでなくvPのレベルであり、また、いわゆる主語・述語関係とも無関係である。仮にPPとvPが $\phi$ 素性を共通して持っており、SOの標示が $\phi$ になるとすると、TPとはどう区別されるのか明らかでなくC-I機構においてこのSOが正しく解釈されない。また、PPとvPが $\phi$ 以外の素性を共通に持っていたとして、それがSOの標示になったとしても、標示がv(P)でなければC-I機構で述語と解釈されない。そこで、内部併合に参加するもの同士が共通して持つ素性を出来上がるSOの標示とするのではなく、内部併合を引き起こす極辺素性を持った主要部自体を出来上がるSOの標示とすることにしよう。極辺素性はChomsky(2005)に従いフェイズ主要部に与えられ、また、極辺素性は削除されず何度でも併合を引き起こせるものと仮定する(Chomsky(2008)参照)。フェイズ主要部に付与された極辺素性により内部併合した要素はフェイズ極辺、つまり、従来の意味での指定部を占めることになる。これにより、フェイズ主要部vの持つ極辺素性が駆動する内部併合で得られたSO = {PP, vP}は標示v(P)を与えられ、意味的に述語の機能を果たすことができる。

脱焦点化移動を受けたPPはvP極辺(vP指定部)を占め、前節で述べたようにこの位置で上位フェイズの主要部Cにより[-Foc]の素性値が与えられる。



既に述べたように指定部という概念は存在せず、むしろそれは主要部にとって2回目以降の併合相手であるに過ぎない。この意味において、2回目以降の併合相手は1回

目の併合相手である補部と統語的に区別されない。スペイン語においても英語においても基本語順では補部に対して主要部が先行するが、主要部先頭パラメタを含め、線形順序の特性は知覚運動(Sensorimotor/SM)機構のみで意味を持つ。SM 機構では転送されたフェイズ毎、ボトムアップで連続循環的に線形順序が決定されていく。(23)(= (22b))のような構造では、*v*の1回目の併合相手であるVPがその第1の補部となり、パラメタ設定に基づき主要部先頭の順序付けが行われて主要部*v*の後方にVPが配置される<sup>7</sup>。続いて*v*(P)の2回目以降の併合相手PPがそれ以前の併合で形成されている(複合的)*v*の補部として(複合的)*v*全体の後方に更に配置されるとする。この結果、(23)のように脱焦点化移動が起こった文の語順は(24)のようになると期待される。

(24) (\*)*María puso el libro sobre la mesa.* (= (4a))

ところが、この語順ではスペイン語で意図されるような脱焦点化を受けた文としては不適格である。興味深いことに、(23)のような脱焦点化を経ながら焦点要素を文末に配置しない(24)と比較される語順が英語では適格となる。

(25) *Mary put the book on the table.*

焦点要素が本来生起すべき文末の位置に脱焦点化された要素が生じる一見矛盾とも思える現象であるが、(25)は併合の中で適用される標示と、SM 機構へ転送後の連続循環的な主要部-補部の順序付けから自ずと導かれたものである。

では、スペイン語で許容されるのは(24)でなく(22b)であるという事実についてはどのような説明がされるだろうか。これについてはスペイン語と英語の代名詞の接語化に関する相違に関係付けられるように思われる。次のような対比を見よう。

(26) a. *María bought it.*  
 b. *María lo compró.*  
*María cl bought*  
 (= (26a))

(26a)に示されるように、英語では目的語が代名詞の場合も「主語-動詞-目的語」の基本語順は維持されるが、スペイン語では(26b)のように代名詞が基底位置に留まらず動詞の左側に接語化される。これは丁度、(22b)と(25)の対比に合致する。一般に、

代名詞は既に前提とされる要素であり、通常、焦点となることはない。この点において、脱焦点化移動による線形順序の変更がある言語に接語化が観察され、線形順序の変更が無い言語に接語化が観察されないのは全くの偶然ではないように思われる。

接語化については、(27)のような接語規準(*clitic criterion*)が Sportiche (1996) によって提案されている。

(27) The Clitic Criterion:

At LF

- i. A clitic must be in Spec-head relationship with a [+F] XP.
- ii. A [+F] XP must be in a Spec-head relationship with a clitic.

Sportiche は接語を機能範疇の主要部 H とし、その指定部に[+F](= [+specific])を持った XP が LF までに移動していなければならないとする。ただし、接語化の場合は H が顕在化し XP は隠在的(*pro*)になる。スクランプリングの場合は H が隠在的であり XP が顕在化するが、今問題としている脱焦点化移動は後者のスクランプリングに当たる。H を  $v$  とすると、[+specific]あるいは前提的となる XP が移動の結果、 $vP$  指定部で顕在化する。Rizzi (2010) の「規準凍結」によれば、作用域・談話解釈に関わる何らかの規準を充たすように当該の規準位置に移動が為され、その場で凍結される<sup>8</sup>。作用域・談話解釈についての情報は表層の線形順序から判読されるので SM 機構にも関わる顕在的なレベルが問題となり、規準凍結については LF ではなく、むしろ転送時に起こると考えるべきであろう<sup>9</sup>。

規準位置となる従来の意味での指定部については仮定しないものすると、接語規準は再解釈される必要がある。指定部に関してはフェイズ主要部に付与された極辺素性を充たすべく内部併合した極辺の要素と上で仮定したが、Kayne (1994) の反対称性理論に代表されるように、指定部は従来、句の左端に生じるものとされてきた。そこで、作用域・談話解釈が付与されるようなフェイズ極辺を規準位置とし、転送の際にその場で規準凍結され、線形順序上ではフェイズ左端に固定されるものとしよう。更に、規準凍結の実現の仕方は、個々の作用域・談話解釈素性や言語により異なると考えられる。例えば、疑問詞疑問文において焦点の一種である *wh* 演算子が義務的且つ可視的に規準位置を占める言語(英語等)とそうでない言語(フランス語<sup>10</sup>等)が存在する。そこで、次のようなパラメタを提案することは妥当のように思われる。

(28) 基準凍結パラメタ :

フェイズ  $\Phi$  の極辺を占める要素は規準凍結を {受ける (ON) | 受けない (OFF)}。

(28)は各言語でフェイズ毎に設定されるパラメタであることが意図されている。問題としている脱焦点化に関し、 $vP$  フェイズはスペイン語ではパラメタが ON に設定され、英語では OFF に設定される。

(28)のパラメタ設定は、一見、事実を記述しただけのようにも思えるが、この設定の仕方の相違には次のような可能性が考えられる。Kayne の反対称性理論に基礎を置きながら、Koopman (2000)は同じ句の指定部と主要部が両方同時に音形を持つ要素によって占められることは許されないとする。それにより、2重詰め COMP フィルターの効果などが説明される。これが正しいと仮定し、2つの言語における動詞移動、つまり、 $v$ -to-T 移動の有無に注目する。スペイン語は  $v$ -to-T 移動が可視的に起こり、動詞が  $vP$  から摘出される言語である。他方、英語については(少なくとも可視的には)  $v$ -to-T 移動が起こらず、動詞は  $vP$  に留まる。非焦点要素は脱焦点化移動により  $vP$  極辺に併合されるとした。フェイズ極辺、つまり、指定部と主要部に音形を持った要素が同時に現れることは Koopman が言うように不可能だが、スペイン語のような  $v$ -to-T 言語では、 $vP$  極辺に非焦点要素のみが残留するため、その位置で規準凍結が適用されても問題が起こらない。

(29) ...  $v$ -T [ $vP$   $\overline{XP}_i$ ]  $t_v$  [ $vP$  ...  $t_i$ ] ...

$v$ -to-T が(可視的に)欠如している英語では、フェイズ極辺の2重詰めされた状況が生じ、転送後の線形順序の計算の段階で破綻が生じると予測される。しかし、(28)のパラメタが OFF と設定されることにより、破綻は回避されると思われる。規準凍結されなかった非焦点要素は規準位置の  $vP$  極辺で[-Foc]を付与されながら、 $v$  の第2補部として捉え直されるとしてみよう。転送後、主要部先頭パラメタにより補部は主要部に後続するため、非焦点要素が文末( $vP$  右端)に配置される。

(30) a. ... T [ $vP$   $\overline{XP}_i$ ]  $v$  [ $vP$  ...  $t_i$ ] ...  
 ↓  
 b. ... T [ $vP$   $\overline{vVP}$   $XP_i$ ] ...

v-to-T 移動が無いとき(30)に見るような配置転換が自動的に行われるのであれば、(28)のようなパラメタを立てることは恐らく不要となり、パラメタの設定が関与するとすれば、それはむしろ(可視的)v-to-T 移動に掛るものとなろう。

以上では、SO が転送時までには標示を与えられない限り解釈不可能になるという Chomsky(2013)の主張を受け入れることにより、一見矛盾しているとも思える英語の脱焦点化について説明を試みた。Chomsky によれば、フェイズ極辺に指定部要素が存在する場合、指定部と主要部が何らかの素性を共有する場合を除き、標示を受けるため指定部要素がフェイズ極辺から抽出されなければならない。これについては極辺素性を持った主要部側の標示を継承するとし、極辺を占める指定部要素は主要部の第2補部として捉え直されるという修正を加えた。フェイズ極辺に指定部要素が存在する状況では、極辺を占める要素間の線形順序が決定されない可能性を指摘した。ロマンス語では vP から v が抽出されるため、非焦点要素が vP に内部併合されたとしても vP 極辺における線形順序が算定可能である。英語は v の抽出がされないが、内部併合を受け脱焦点化される要素が主要部の第2補部と捉えられることにより線形順序は問題無く決定される。後者は主要部の移動を伴わない分、言わばデフォルトの手順とも思われる。このようなフェイズ極辺における線形順序算定については、主要部抽出が重要な意味を持つように思われる。が、Kayne/Koopman の問題がここで真に問題となるかどうか疑問が残る。理論的整合性の観点から、この可能性については取り敢えず保留とし、次節以降の議論では(28)の規準凍結に関するパラメタを維持する。

#### 4. VoiceP フェイズ

前節までは、標準的なフェイズ理論に基づき、文派生の基本単位であるフェイズは CP と vP であると仮定してきた。この仮定は焦点要素および脱焦点化要素の分布を捉える際、重要であった。PIC に則って、v からその補部内に[+Foc](焦点解釈)が与えられ、C からその補部内の vP 極辺にまで[-Foc](前提解釈)が与えられる。また、一見、矛盾するように見える事実についても同様の分析は無関係ではなかった。矛盾のように見えるのは、転送時、標示と線形順序のための調整が行われたためである。しかし、フェイズの資格を持つ SO が CP と vP のみであるとする仮定については異論が無いわけではない。本節ではこのような点について若干触れておくことにする。

フェイズは一致や移動といった演算の適用に関する循環領域となり、統語的な基本単位となる。また、省略、つまり、音声的消去が可能な領域の判定にも関与している。基本的に省略は統語的同一性に基づき、先行詞となる SO と同一の統語的特徴を持った後続の SO に対して適用される。統語的同一性の他にも、フェイズ主要部の補

部でなければならないという条件が課される。換言すれば、フェイズ主要部によってその補部の省略が認可されなければならないのである。例えば、「間接疑問文縮約」として知られる TP の省略はそれを補部とする CP フェイズ主要部によって認可され((31b))、VP の省略はそれを補部とする vP フェイズ主要部によって認可される((32b))((32)では、Rouveret(2012)の VP 省略分析に従えば、T を占めるダミー助動詞 do が v の位置から移動した可能性もある)。

- (31) a. They arrested someone, but I don't know [<sub>CP</sub> who C [<sub>TP</sub> they arrested *t*]].  
 b. They arrested someone, but I don't know [<sub>CP</sub> who C ~~NP~~].
- (32) a. Lucy likes jazz and Sally does [<sub>vP</sub> v [<sub>VP</sub> like jazz]] too.  
 b. Lucy likes jazz and Sally does [<sub>vP</sub> v ~~VP~~] too.

省略に対してこのようなフェイズ主要部による補部の認可が関与するという見解は、Bošković(2014)およびその引用文献に見られるように既に広く受け入れられている。フェイズの候補としては CP と vP の他に様々な可能性も論じられ、中でも DP は Chomsky(2001)において言及があるが、実際に DP 内では(31)-(32)においてと同様の補部(NP)の省略が起こる。

- (33) a. You like Jane's book, and I like [<sub>DP</sub> Peter D('s) [<sub>NP</sub> book]].  
 b. You like Jane's book, and I like [<sub>DP</sub> Peter D('s) ~~NP~~].

(33)では属格形態素 's が DP フェイズ主要部の位置を占め、その補部である NP の省略を認可している。

省略の条件に統語的同一性があるとすると、次のような例は問題があるように見える。

- (34) a. The janitor must [remove the trash] whenever it is apparent that it should be [~~removed~~ *t*].  
 b. This guy's tape obviously should be [scrutinized *t*] more than you did [~~scrutinize~~ *it*].

(34a)では省略部分が受動態動詞句であるのに対し、先行詞が能動態動詞句である。逆に、(34b)では省略部分が能動態動詞句であるのに対し、先行詞が受動態動詞句で

ある。したがって、省略部分と先行詞とでは[Voice]素性について同一でなく、この素性がV(またはv)に与えられた統語素性であるとする、(32b)と同様のVP省略は期待されないはずである。が、[Voice]がvP外の要素に備わったものであり、態の能動・受動に拘わらずvP内の項構造に関する情報は変わらないとすると、省略部分と先行詞でvPについては統語的に同一と考えることができる。節構造については統語構造地図のアプローチに代表されるように各種の機能範疇がCPとvPの間に配列される。(35)はCinque(1999)がTPを細分化し機能範疇の普遍的階層を提案したものを簡略化している。

(35) (CP >) ModP<sub>epistemic</sub> > TP > AspP > ModP<sub>deontic</sub> > VoiceP (> vP)

(35)では右へ進むほど構造上、下位の階層となりvPに近づく。左端は認識的法性に関わるMod<sub>epistemic</sub>の句であり、Mod<sub>epistemic</sub>の下位に時制に関わるTP、その下位には相に関わるAspP、その右側に位置するのは義務的法性に関わるMod<sub>deontic</sub>の句である。そして、その下位に態に関わるVoicePが続く。Merchant(2013)が主張するように、(34)で問題となる[Voice]はvPの直上に位置するVoicePの主要部に帰ることが妥当であるとする、(34)においてvPは省略のための統語的同一性を充たす。この省略もフェイズ主要部によって認可されるならば、vPの省略の認可はそれを補部として取るVoiceによることになり、VoicePはフェイズと見做される。

(36) The janitor must [<sub>VoiceP</sub> Voice [<sub>vP</sub> remove the trash]] whenever it is apparent that it should be [<sub>VoiceP</sub> Voice [<sub>vP</sub> ~~removed~~]]. (= (34a))

なお、vPを支配するVoicePがフェイズを成すという分析は、Collins(2005)やBaltin(2012)等にも見られる。

前節において、vP極辺に指定部要素が現れる場合、規準凍結パラメタの設定により英語では指定部要素がvP極辺に凍結されず、また、標示のため指定部要素がvの第2補部と捉え直され、線形順序も決定されるとした。しかし、vPを包含するVoicePがフェイズであるとする、vP内の要素がCPフェイズ主要部から脱焦点化されるために、少なくともVoiceP極辺まで移動していることがPICから要求される。その場合、脱焦点化移動を受けた非主語が主語と動詞の間に生じる(37)のような語順が英語で可能になるかもしれない。



(37)  $\underline{DP}_{su}$  (AUX) [<sub>VoiceP</sub>  $\underline{XP}$  [<sub>vP</sub>  $\underline{V-v}$  [<sub>vP</sub>  $t_v \dots t_{xp}$ ]]]]

しかし、これは事実と異なる。英語として適格な語順を得るために、例えば主要部 V-v が vP から抽出され Voice まで移動したとしても解決にはならない。V-v が Voice へ移動した場合、結果として、脱焦点化移動を受けた要素と V-v は VoiceP 極辺に併存することになる。

(38)  $[_{CP} C [_{TP} \underline{DP}_{su} \dots [_{VoiceP} \underline{XP} \underline{V-v-Voice} [_{vP} t_{su} t_v [_{VP} t_v \dots t_{xp}]]]]]]]$

(38)で主要部 V-v-Voice と共に VoiceP 極辺を占める XP は C から脱焦点化を受ける。既に vP フェイズについては規準凍結パラメタを設定したが、VoiceP フェイズについては設定していないため、(3節で触れた Kayne/Koopman の問題は生じないものとする)このままでは語順は依然として(37)と変わらない。そこで、VoiceP フェイズについても規準凍結パラメタを OFF に設定する。その極辺(左端)に指定部要素は固定されないで、デフォルトとして、指定部要素が Voice の第2補部と見做され、線形順序上では VoiceP の右端に位置付けられ、その結果、V-v の Voice への移動の有無に拘わらず、(39)が得られる。

(39)  $\underline{DP}_{su}$  (AUX) [<sub>VoiceP</sub>  $\underline{V-v} \dots \underline{XP}$ ] (= (25))

最終的に得られた(39)は、既に3節で見た、非焦点要素が文末に生ずるという一見、矛盾のようにも思われた状況である。スペイン語／イタリア語については VoiceP 極辺に非焦点要素が移動して来たとしても、前節までと変わらず、vP から抽出された主要部 V-v が Voice を経由して更に上位の機能範疇である T まで到達する。よって、VoiceP フェイズを仮定しても、このフェイズに関する規準凍結パラメタがスペイン語／イタリア語で ON に設定される以外はこれまでの議論が維持される。

VoiceP をフェイズとすると、vP のステータスが問題となる。フェイズ主要部はその特性として探査子となり、一致を介して目標子に対する一定の素性値付与を行う。前節までは、vP をフェイズと見做し、主要部 v はその補部領域内にある要素に対し一致を介して [+Foc] の素性値を付与するとしてきた。これによれば、v から [+Foc] を付与されるのは、v により C-統御を受ける領域の中にあるものに限られる。動作主のような  $\theta$  役割を付与される外項は vP 内主語仮説の下、まず vP 内に導入されるが、そ

れは *vP* 極辺の位置である。故に、外項は決して [+Foc] を付与されることはなく、焦点と解釈されることは不可能ということになる。しかし、これについては少なくともスペイン語では可能であったし ((13b) 参照)、英語のような言語でも次節で取り上げるように可能な場合がある。外項に焦点解釈が与えられるためには、[+Foc] 付与子が *vP* 主要部でなく、少なくとも *vP* を包含している句の主要部でなければならない。この点において、[+Foc] 付与は *vP* を包含し且つフェイズの資格を持つ可能性を指摘した VoiceP の主要部によることが考えられる。一方、*vP* については、Chomsky (2000) の意味で外項を含めた全ての論理項が完全に揃う命題的な単位であることがフェイズの一つの特徴付けであるとすれば、*vP* のフェイズ性は維持されるべきである。また、次節の議論の重要な前提となるが、*vP* 極辺に併合された要素がそこから摘出されない場合、この指定部要素が極辺(左端)に固定されないとすると、*vP* を規準凍結パラメタが OFF に設定されるフェイズと見做す必要がある。以下、フェイズとして、CP と *vP* に加え、VoiceP も仮定することにする(上で触れた DP については射程外とし、これ以上は取り上げない)。

## 5. 提示の *there* 構文

今、*vP* に加え VoiceP を CP フェイズの内側のフェイズと仮定することにした。それにより焦点が関係する事実についてどのような説明を与えることになるか考えていこう。

上述のように、英語はスペイン語などと異なり、非焦点要素が文末に生ずることが許される。これについては C-I 機構における解釈のための標示および SM 機構における線形順序の算定との関係から説明が付くことを述べた。これとは正反対とも思われる事実がある。通常であれば(40)に見られるように TP 指定部、つまり、文頭の主語位置に現れる能動態非能格動詞の外項が(41)の例のように文末に現れ、焦点と解釈されるのである。

(40) The well-known actor walked through passport control.

(41) There walked through passport control a well-known actor. (Lumsden (1988))

(41)では、PP(through passport control)が途中に介在することからも、文末に現れている外項(a well-known actor)が V の補部ではなく VP 外の位置を占めていると考えることができる。この点で非対格動詞に基づくいわゆる存在の *there* 構文と異なっており、Milsark(1974)は(41)のような文を「動詞句外存在文(outside verbal existential

sentence)」と呼んだ。文末に置かれた外項は情報焦点あるいはそれと同一視し得る提示焦点と解釈される。この外項が焦点であることは、Safir(1985)が指摘するように、存在の *there* 構文の内項について見られるのと同様の(実際には緩やかではあるが)定性効果が観察されることでも確認ができる。

- (42) a. There walked into the room an old man.  
b. \*?There walked into the room John.

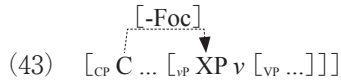
この意味で Coopmans(1989)、Rochemont and Culicover(1990)などにおいては「提示の *there*(挿入)構文(presentational *there*(-inserted) construction)」とも呼ばれている。本節では(41),(42a)に例示される外項を焦点とする *there* 構文について論じるが、呼称としては提示の *there* 構文あるいは単に提示構文を用いる。

提示の *there* 構文の存在から、表面上、情報構造を反映した語順に転換する移動が無いように見えた英語においても、スペイン語／イタリア語と同様、やはり脱焦点化移動の効果が顕現化されることが実際にあるように見える。しかし、英語はスペイン語と異なり VoiceP フェイズについて規準凍結パラメタが OFF に設定されているため、脱焦点化の移動先である VoiceP 極辺(左端)では非焦点要素が固定されず、VoiceP 右端に配置されることになる。この前提に立つと、これまで議論してきた例文(25)の語順と(41),(42a)の語順は言わばパラドクスを成すと言える。つまり、前者の語順が得られるならば後者の語順は得られないと予測される。

(41),(42a)の外項の生起位置について考えてみよう。外項はまず *vP* 極辺に外部併合される。通常、適用される TP への内部併合(EPP 効果)を保留してみると、外項は *vP* 極辺に留まったままとなる。Chomsky(2008)によれば、外部併合も内部併合同様、主要部に与えられた極辺素性により引き起こされる。この説により、外部併合が適用された場合も *vP* の標示が可能となる。*vP* 極辺に外部併合し、その位置に留まれば、外項は極辺素性を持った主要部 *v* の第2補部と見做される。そして、英語では *vP* フェイズが規準凍結パラメタについて OFF と設定されているとするならば、*v* の第2補部と捉えられた外項は線形順序上、*vP* 右端に配置されることになる。これは丁度、(41),(42a)の状況に合致する。

外項は標示のために *v* の補部と見做されたわけであるが、線形順序とは無関係な転送前の統語構造において *vP* 極辺に位置していることから、直ぐ外側のフェイズ主要部による探査を受けることが可能である。3節までは VoiceP フェイズを仮定していなかったため、脱焦点化移動を受け、*vP* と内部併合した要素は CP フェイズ主要部か

ら[-Foc]の素性値を付与されるとした。



しかし、前節でフェイズのメンバーに VoiceP が付け加えられたため、(43)のような状況は最早無い。VoiceP フェイズの介在により、PIC に基づいて CP フェイズ主要部が探査可能なのは隣接する VoiceP フェイズの極辺までとなり、vP 内の非焦点要素が [-Foc] を付与されるには VoiceP フェイズ極辺まで移動することが必要となる。



Voice の補部である vP は、C が併合された(44)の段階には既に外部機構へ転送され、vP 極辺の外項も当然ながら CP 主要部による探査を逃れて脱焦点化の対象にならない。また、[+Foc]付与を行う役目も v から Voice へと移った。したがって、Voice の C-統御領域内にある vP 極辺の外項はこの位置に留まることにより焦点の解釈を受けることになる。(41),(42a)では VP 内に PP が存在し、これも Voice の C-統御領域内にあるが、vP フェイズ主要部の補部である VP は既に転送されているので Voice から [+Foc]を受け得ず、前提的解釈と矛盾がない。

提示の there 構文は存在の there 構文と表面的には類似するところがあるが、ここで相違もあることに注目したい。例えば、存在構文の場合、(45)で下線を施しているように非対格動詞の直後に内項の DP が現れるが、提示構文の場合、非能格動詞の後に生ずる外項は(41),(42a)で見たように文末(vP 右端)に現れるのであって、(46)のように動詞に隣接しない。

(45) There emerged several new facts at the meeting.

(46) \*There walked a well-known actor through passport control.

(Lumsden (1988))

Coopmans (1989) では提示構文の派生について(47)のような分析が与えられている。



(47) では矢印が示しているように外項の焦点位置への移動が含まれる。これは Stowell(1981)、Safir(1985)、Newmeyer(1987) 等で採用されてきた後置分析を Coopmans が折衷的に踏襲したものであり、基本的に旧来の典型的分析と言える<sup>11</sup>。近年の、特に Kayne(1994)以降の伝統に従えば、一般に右方への移動や付加といった操作は統語を司る計算機構では起こり得ない。無論、左方、右方といった線形的概念は計算機構の演算には一切無関係であり、SM 機構に転送後、初めて問題となるものである。本論文では、vP 極辺に外項が現れるとそれが v の第 2 補部と捉えられ、SM 機構において主要部先頭パラメタに基づき音声的に vP 右端に具現されるとした。この提案によれば、提示構文には(47)でのような文字通りの後置は含まれない。(47)の分析を本論文の分析で置き換えると(48)のようになり、矢印は外項 DP<sub>EA</sub> の右方移動ではなく、音声的な具現が vP 右端で為されることを意味する。

(48) [CP there [TP e T [VoiceP Voice [vP DP<sub>EA</sub> v [VP V PP] ]]]]

したがって、存在構文と提示構文で焦点となる項 DP の分布の相違は、前者においては内項が非対格動詞にとっての第 1 補部(正確には V の第 1 補部)であるのに対し、後者においては外項が非能格動詞にとっての第 2 補部(正確には v の第 2 補部)と見做されるからに他ならない。なお、非対格動詞の vP は(強)フェイズでないことに注意されたい(注 2 参照)。

提示構文と存在構文の別の相違点として、後者は(49)のように例外格標示(ECM)補文として生起することができるが、前者は(50)のように生起することができない。

(49) John expected [there to be a man in the garden].

(50) \*John expected [there to walk into the garden a man].

(Coopmans(1989))

Coopmans によれば、提示構文において there はある種の副詞であり、格を必要とする項 DP と項連鎖を形成しない。つまり、there は非項であり、それが占める文頭の位置は(47)の分析に見られるように非項位置である COMP とされる。本論文の分析(48)ではそれが CP 極辺となる。提示構文において there が CP 極辺を占めるとすると、ECM 補文は CP を伴わない TP であるため there の生起自体が不可能となり、(50)が非文となることが説明される<sup>12</sup>。この分析の妥当性は次のようなペアからも裏付けられる。

(51) Are there any men in the room?

(52) \*Did there walk into the room a man with a long blond hair?

(Rochemont and Culicover (1990))

(51)のように存在構文は疑問文にすることができるが、(52)のように提示構文は疑問文にすることができない。直接疑問文における主語・助動詞倒置が T-to-C 移動によるものとする、(48)の構造で *there* が CP 極辺中、CP 主要部の位置を占めるならば T-to-C 移動自体が起こらず、また、指定部要素であるとするならば *there* が T が占めるはずの C より後に生起しない。したがって、(52)は非文として排除される<sup>13</sup>。

提示の *there* 構文に用いられる動詞の意味についても注目したい。存在構文ほど厳格ではないが、提示構文に現れる動詞には一定の意味的制約があり、実際に以下のような例は許容されない。

(53) a. \*There walked a man.

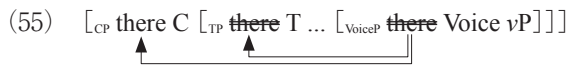
b. \*There sleeps someone.

(54) \*There ate a bone on the lawn a huge bulldog.

cf. There entered the room a tall dark stranger.

動詞単独というより動詞句全体の意味を考慮に入れる必要があると思われるが、意味的制約として、*there* は提示構文にあっても「存在」、「出現」あるいは「移動」といった意味を表す *vP* とのみ共起すると思われる。Coopmans に従い、提示構文に生じる *there* は副詞であるとするが、最終的には CP 極辺に属することから、言わば虚辞的話題演算子であると見做す。*there* と意味的に共起可能な *vP* が Voice の補部に選択されているときに限り、*there* はその VoiceP 極辺に外部併合されるとしよう。*there* は話題演算子であるため、VoiceP 極辺から CP 極辺へ移動する。*there* が CP 極辺を占めるとすると TP 指定部は何が占めることになるのか。Chomsky (2008) によれば、C に本来与えられた極辺素性は他の素性と共に T へ継承され、EPP 効果もたらされる。Coopmans の提案した (47) の構造では空範疇 *e* が現れている。しかし、英語は代名詞脱落言語ではなく、空主語は一般的でない。よって、(くだけた文体や限られた構文で語用論的に主語を容易に復元できるような前提解釈の *pro* を除き、) 構文特殊な空主語を認めるべきでない。T に継承された極辺素性を充たすため、*there* は副詞ではあるが TP 指定部へ移動するものとしよう。同一 CP フェイズ内で起こる *there* の2つの

移動(CP 極辺への移動と TP 指定部への移動)は、Chomsky が述べているように同時平行的に行われ、音声的書き出しは移動のできるコピーのうち階層上最上位、つまり、CP 極辺を占めるもののみ適用される。



ついでながら、there のこのような移動を仮定すると次のような事実も説明される可能性がある。

(56) \*There never stepped out in front of my car a pedestrian. (Aissen(1975))

(56)は、提示構文において文否定辞による干渉効果が観察されることを示している。このような文否定辞による干渉は、次のような例からもわかるように、存在構文では観察されない。

(57) There never arose any serious differences on the fundamentals.

(56)は Ross(1984)の「内部の島」の一種と考えられ、その典型例である(58)と比較することができる。

(58) \*How<sub>i</sub> didn't you find a solution t<sub>i</sub>?

干渉効果の説明のため、文否定／極性に関与する機能範疇 NegP が TP と VoiceP の間に介在する(59)のような構造を仮定しよう。

(59)  $[_{CP} C [_{TP} T \dots [_{NegP} \text{Neg} [_{VoiceP} \text{there } \text{Voice} [_{vP} v VP]]]]]]]$

Akahane(2006, 2008)で主張されているように、NegP がフェイズを形成するとすると、VoiceP 極辺に外部併合された there は PIC の要求から CP 極辺に移動する前に必ず NegP フェイズ極辺に立ち寄らなければならない。Akahane(2006)の議論を基本的にそのまま受け入れると、フェイズ極辺への移動については、NegP フェイズ主要部に対し随意的に EPP 素性を付与することにより駆動される(Chomsky(2000)参照)。EPP 素

性は D 素性と異ならないため(Chomsky(1995)参照)、EPP 素性を充たすことができるのは D 素性をその標示とする DP(または DP を直接包含する PP)である。存在構文の *there* は D 素性をその標示とし、VoiceP 極辺から NegP 極辺を経由する移動が可能である。その結果が(57)である。対照的に、提示構文の *there* は副詞であるため D 素性を持たないとすると、VoiceP 極辺への移動が動機付けられない。したがって、CP 極辺への移動も PIC によって阻止され、(56)のような干渉効果が生じる。EPP 素性については極辺素性の一種と見做せるが、D の併合のみ許し、Neg のような特定のフェイズ主要部にのみ付与される点について検討の余地がある。他の可能性も吟味しなければならないが<sup>14</sup>、本節の提示構文の分析を支持する事実と言える。

vP について、英語では規準凍結パラメタが OFF と設定されているとすることから提示の *there* 構文での語順と解釈が捉えられた。これが他の言語でどのような含意を持ち得るか、1つだけ言及しておく。スペイン語とイタリア語は系統的理由から類似の特徴を持っており、どちらの言語でも脱焦点化移動が観察されることは既に触れた。例えば、(13)/(14)のように主語を焦点とするとき、両言語とも主語を文末位置に据えるように、それ以外の要素に脱焦点化移動を適用する。

- (13) a. \*Juan comió una manzana. (スペイン語)

Juan ate an apple

'Juan ate an apple.'

- b. Comió una manzana Juan.

(≈ (13a))

- (14) a. \*Gianni ha mangiato una mela. (イタリア語)

Gianni has eaten an apple

'Gianni ate an apple.'

- b. ?Ha mangiato una mela Gianni.

(≈ (14a))

しかし、両言語に相違が無いわけではない。(60)-(61)に示すように、スペイン語では「動詞-主語-目的語」の語順が許されるのに対し、イタリア語では Belletti and Shlonsky(1995)が指摘するように、それが許されない。



- (60) Ayer presentó María su renuncia. (スペイン語)  
 yesterday handed-in María her resignation  
 ‘María handed in her resignation yesterday.’
- (61) \*Ieri ha dato Gianni un libro a Maria. (イタリア語)  
 yesterday gave Gianni a book to Maria  
 ‘Gianni gave a book to Maria yesterday.’

端的に言えば、イタリア語で主語が動詞の後に現れる場合、文末に置かれなければならない。Zubizarreta(1998)は、(14b)の語順を作り出すため、イタリア語ではスペイン語と異なり、主語を TP から摘出した後、主語を飛び越えるように TP 全体を移動させている。明らかにこのような移動は他の要素に適用される脱焦点化移動とは異質であり、動機付けも強いと思われぬ。

そこで、まずスペイン語については VoiceP と vP 共に規準凍結パラメタを ON に設定しているとしてみよう。それにより、(60)で主語 María と目的語の su renuncia がそれぞれ VoiceP と vP の極辺へ移動し、動詞も T まで移動するため、「動詞－主語－目的語」が得られる。

- (62) [<sub>TP</sub> ... presentó-T ... [<sub>VoiceP</sub> María<sub>i</sub> [<sub>vP</sub> su renuncia<sub>j</sub> t<sub>i</sub> [<sub>vP</sub> t<sub>v</sub> t<sub>j</sub>]]]] (= (60))

同様のことがイタリア語で適用されるならば、やはり「動詞－主語－目的語」が許されるはずであるが、事実ではない。イタリア語において主語が非焦点要素ならば、VoiceP 極辺で C から [-Foc] を付与されるだけでなく、恐らく T との一致により TP 指定部まで移動することが義務付けられると考える(次節の議論も参照)。主語が焦点要素であった場合、vP 極辺に留まり Voice から [+Foc] を受けるとしても、規準凍結パラメタを ON に設定していたのでは主語が目的語の前に生じる可能性が残る。そこで、イタリア語の vP について、英語と同様、規準凍結パラメタが OFF に設定されているとしてみる。焦点要素としての主語は v の第2補部と見做され、vP 右端、つまり、文末に配置され、結果として、適格な語順が得られるのである。Zubizarreta にも言及があるが、イタリア語でも文末に焦点解釈を受ける主語が現れる場合、提示構文に現れているそれか、さもなければ、強調アクセントや焦点化副詞を伴う同定焦点のそれということになる。

## 6. 残される問題：文頭の主語の焦点解釈

前節では、能動文で通常 TP 指定部を占める外項が文末に現れて焦点解釈を受ける提示の *there* 構文を取り上げた。[+Foc]が *v* によって付与されると仮定した場合には、*vP* 極辺を占める外項が焦点解釈を受けることが C-統御関係上、不可能であった。*vP* を包含する VoiceP をフェイズとし、その主要部 Voice が [+Foc] を付与すると仮定し直すことによって、*vP* 極辺に留まる外項に焦点解釈が与えられた。また、英語では標準凍結パラメタ OFF の設定から、*vP* フェイズ極辺に留まる指定部要素が第2補部と捉え直されると、適確な語順も得られた。しかし、英語の能動文で外項は TP 指定部に現れることが一般的である。その場合、文末にのみ焦点要素が現れるとするならば、TP 指定部を占める主語は常に焦点解釈が与えられないはずである。本節では、この問題について議論を加える。

まず、Zubizarreta (1998) に引用されている次のような英語の例を見たい。

- (63) a. *Mary* voted.  
b. *Karl* worked in his office.  
c. *Karl* worked on his manuscript in his office.

(63)の各例は外項を取る非能格動詞の能動文である。下線は文の核強勢が置かれている箇所を示すが、このことから文末に焦点が現れていることが分かる。前節で扱った提示構文では *vP* 極辺に留まり語順上は文末に現れる外項が焦点となったが、(63)のように主語位置 (TP 指定部) に生起している外項は焦点解釈を受けないのは当然のことと思われる。ところが、(64)のように同様の非能格動詞能動文において、主語位置の外項が焦点解釈を受けることが可能とされる。

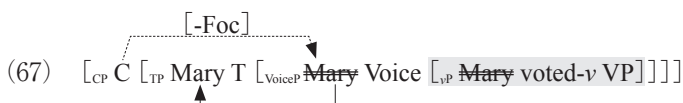
- (64) a. *The spider* jumps.  
b. *Mary* voted.  
c. *The baby's* crying/laughing.

(64)の各例では核強勢が文頭の主語に置かれ、TP 指定部を占める外項が焦点であることが示されている。対比的な文脈とは無関係な状況で、文頭の位置を占める主語が焦点となるには全く条件が無いわけではない。Schmerling (1976) の観察によれば、動詞句が述語動詞のみを含む場合、つまり、目的語などが *vP* 内に生起していない場合、そのような解釈が可能となる。TP 指定部を占める主語が焦点解釈を受けるのは外項

だけに限らず、(65)-(66)の a. の例に見るような非対格動詞の内項にも当てはまる。

- (65) a. Johnson died.  
 b. Truman died.  
 (66) a. The statue's head is missing.  
 b. The statue's head is missing.

TP 指定部まで到達しているのであれば、既に CP フェイズの領域に入っていることになるので、外項、内項を問わず主要部 C から探査が及び、一致によって[-Foc]が付与される。だとすると、TP 指定部にある(64)の外項や(65)-(66)の a. の内項は[-Foc]が付与されて前提解釈を受けるはずである。実際に、その解釈は(63)や(65)-(66)の b. で為されている。では、文頭の主語について、(63)や(65)-(66)の b. のような前提解釈と(64)や(65)-(66)の a. のような焦点解釈はどのようにして得られるのだろうか。まず、前者については今述べたとおりのことで説明が付こう。(63a)を例に取ろう。



外項の Mary は vP 極辺から VoiceP 極辺へ引き上げられると、その外側の CP フェイズ主要部から探査可能となる。ここで Mary は C から[-Foc]を付与されるが、それと同時に T の持つ極辺素性により TP 指定部へ引き上げられる。前節でも触れたように、T に与えられた極辺素性は時制素性や φ 素性と共に CP フェイズ主要部から継承されたものである。

C の持つ素性と T に継承された素性によって引き起こされる演算は同時平行に行われる。そのように仮定する利点としては、「主語の島」効果の例(68)と対比される(69)のような文の説明が可能になることである。

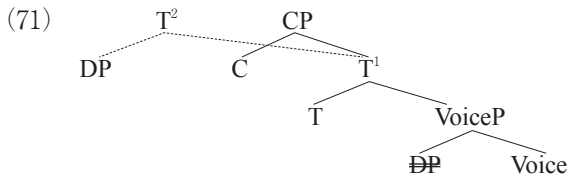
- (68) \*Of which car did the driver cause a scandal?  
 (69) Of which car was the driver awarded a prize?

Chomsky(2008)によれば、(69)の派生は概略、(70)のようになる。なお、受動態 vP はフェイズを形成しないと(注2参照)、VoiceP も省いている。

(70) [<sub>CP</sub> of which car (was)C [<sub>TP</sub> the driver T ... [<sub>VP</sub> awarded [<sub>the driver of which car</sub>] a prize]]]

wh は受動文の主語の一部であるが、(68)の場合と異なり、TP 指定部から抽出されたのではなく、V の補部から抽出されている。このようなことが起こるのは、C と T の素性が同時に移動を駆動するためである。

(70)の派生については、Epstein, Kitahara and Seely (2012) (以下、EKS)によって指摘される次のような問題がある。文の派生が循環的に行われるためには、TP に指定部が併合され TP が完成してから、その後、C が併合される必要がある。ところが、(70)においては C と TP が併合した後、TP 指定部が付け加わるという反循環的な派生となる。同様のことは(63a)の派生である(67)にも当てはまる。このような状況を是正するため、EKS は、C と TP(T1)が併合すると、T1が指定部の DP を併合するのが同時に起った際、(71)のような双頂構造が形成されると提案している。ただし、VoiceP/Voice は EKS の vP/v を読み替えている。



双頂構造は根を一にしないため、そのままでは文構造を維持することができないが、CP フェイズにおいて補部領域である TP を(T¹と T²の両方を含め)全て外部機構へ転送することにより CP 側だけが残されるので、この問題は解決される。双頂構造は(強)フェイズ主要部からその補部の非(強)フェイズ主要部に素性が継承されるときにのみ形成される。そのような状況は CP-TP 以外に vP-VP にも適用される可能性が考えられるが、vP-VP の(あるいはそれ以外の)双頂構造については別の機会に譲ることとしてここでは論じない。

EKS の提案を採用し、(63)および(65)-(66)b. の前提解釈と、(64)および(65)-(66)a. の焦点解釈がどのように与えられるかの説明に戻ろう。TP 主要部に与えられている時制素性、φ 素性、極辺素性は C から継承されたものであるとした。本論文では更に脱焦点化に関わる [-Foc]素性を C に与えているが、[-Foc]素性も T へ継承されることがあるとしてみよう。これらの素性の全てが C から T に継承されると、C に代わって T が[-Foc]の素性値付与を行う。(71)の構造で、T から[-Foc]を付与される VoiceP

極辺の DP が同じ T の極辺素性によってその指定部まで引き上げられる。つまり、T によって DP に対する [-Foc] 付与とそのコピーの作成(項連鎖の形成)という一連の演算が一遍に行われる。よって、DP の何れのコピーも [-Foc] を持つことになる。このとき、(67) と異なり、C は如何なる関与もしていない。音声的書き出しは C-統御階層上、最上位のコピーに対して行われ、それ以外のコピーからは転送時に音韻素性が削除されるが、同時に [+Foc] も下位コピーから全て削除されるとしてみよう。TP 指定部で発音される上位コピーは [-Foc] の削除を受けないので、前提解釈が与えられる。なお、同様の [+Foc] の削除は脱焦点化移動においても、素性値の違いはあるものの、必要である。vP 極辺から VoiceP 極辺に移動が起こる際、下位コピーに付与されていると考えられる [+Foc] の削除がされなければ、1 つの連鎖の中に素性値の齟齬([-Foc] と [+Foc]) が生じてしまい、非文となる。

時制素性、 $\phi$  素性、極辺素性、[-Foc] 素性の全てが常に C から T に継承されるのであれば、TP 指定部を占める DP は専ら前提解釈が与えられることになる。しかし、それは事実ではなかった。そこで、これらの素性の中、時制素性、 $\phi$  素性、極辺素性が C から T に継承され、[-Foc] 素性は継承されず C に留まることがあるとしよう (Miyagawa(2010) 参照)。(71) の双頂構造において、T は継承した極辺素性により VoiceP 極辺の DP をその指定部まで引き上げる。より正確には、T の素性により DP のコピーが 2 つ作られるのであるが、それらには [-Foc] は共有されていない。平行して、[-Foc] 素性を持つ C が C-統御領域にある VoiceP 極辺の DP に [-Foc] を付与する。同時の適用ではあるが、これは T の素性による演算とは全く別の演算であり、[-Foc] は C の C-統御領域にある DP コピーにしか付与されない。仮に、C が TP 指定部を占める DP の上位コピーに [-Foc] を付与することを試みたとしても、(71) の構造ではその C-統御領域内になく、無駄である。このため TP 指定部の DP コピーには [-Foc] が付与されず、また、下位コピーの持つ [-Foc] は転送時に削除を受けるので、DP の何れのコピーも [+Foc] を持たないことになる。その結果、TP 指定部を占める DP は [+Foc] と矛盾することもなく、焦点解釈の余地は排除されずに残される。

以上のように、TP 指定部を占める DP が前提解釈も焦点解釈もされ得るという事実について、ここでは C から T への [-Foc] 素性の継承が随意的に行われると仮定し、継承されれば [-Foc] 付与が行われ前提解釈になるが、継承されなければ [-Foc] 付与が行われず焦点解釈になるとした。これは上位コピーに付与された [-Foc] のみが有効と考え、C からは直接に [-Foc] が付与されることはないということによる。また、上位コピーに [-Foc] が付与されず、可能性として一種の余剰規則的な仕組みにより [+Foc] が付与されたとしても、Schmerling(1976) が指摘しているように、述語が軽くなけれ

ば主語への焦点解釈付与は無効となる。丁度、主語 **wh** 疑問文に対しての返答文が動詞句を省略するのと同じように、なるべく述語を軽くして主語に焦点を当てようとするのである。

- (72) Who bought the books?  
a. -- John bought the books/them.  
b. -- John did.  
c. -- John.

C から T へ[-Foc]素性の継承がされない場合に TP 指定部を占める DP の焦点解釈が可能になるとしたが、これはあくまでも[+Foc]と素性値において矛盾することがなく、焦点解釈の余地が排除されないに過ぎない。その余地が最終的に排除されずに済むか否かに関しては、Schmerling(1976)や Zubizarreta(1998)にも述べられているように、語用論的要因が大きいと言える。Zubizarreta によれば、(73)には(74a)の焦点構造で表される狭い焦点解釈以外に(74b)の焦点構造で表される広い焦点解釈が可能である。

- (73) A boy has danced.  
(74) a. [<sub>F</sub> a boy] has danced  
b. [<sub>F</sub> a boy has danced]

つまり、(74a)は Who has danced? の返答文に、(74b)は What has happened? の返答文にそれぞれ対応する。このような複数の解釈が同じ核強勢位置から導き出されるという状況についても、やはり語用論的な要因によるとするのが妥当と思われる<sup>15</sup>。

## 7. 結論

本論文では、英語における脱焦点化移動の見た目上の欠如について、スペイン語／イタリア語との比較をしつつ、考察を加えた。Zubizarreta(1998)により、英語では非焦点要素を韻律的に不可視として無視でき脱焦点化移動も不要であると分析されたのであったが、英語でこのような方策が取れ、スペイン語／イタリア語では取れない理由が明らかでないことから、本論文では Chomsky(2013)の標示の理論と Rizzi(2010)の規準凍結を取り入れ、それに代わる分析を試みた。規準凍結パラメタの設定により、スペイン語／イタリア語では VoiceP フェイズ極辺にある脱焦点化要素がフェイズ左

端に凍結されるのに対し、英語では凍結されず、音声的書き出しの際、主要部先頭パラメタに基づきフェイズ右端、つまり、文末に配置される。このことにより英語における脱焦点化移動の見た目上の欠如が説明された。更に、英語の主語、取り分け外項の焦点解釈とその生起位置について議論をし、文末、文頭、それぞれの位置に生起する場合の解釈のされ方([±Foc]の付与のされ方)について説明を与えた。

既に言及してきたものも含め、少なからず問題は残される。特に規準凍結パラメタの妥当性についてはより多くの事実によって検証することが必要であろう。また、フェイズのメンバーに VoiceP(と NegP)が追加されることを提案したが、どのような条件を充たせばフェイズとなるのか、より厳密な定義が為されるべきなのは言うまでもない。フェイズとなる SO をかつての「境界節点」や「統率範疇」のように特定の範疇に限定する正当な理由があるのか、あるいは、Bošković(2014)等が主張するようにフェイズを(かつての<sup>16</sup>)「障壁」と同様、構造的文脈の中で決定するとした方がミニマリスト・プログラムにとって望ましいのか、検討を重ねる必要がある。何れも本論文で論じ切れるような問題ではなく、今後の課題となる。

## 注

\*本研究の一部は、科研費(基盤研究(C)22520501)の助成を受けて行われた。

<sup>1</sup> É. Kiss(1998)は同定焦点と情報焦点の相違点として以下のようなものを挙げている。

- (i) a. The identificational focus expresses exhaustive identification; information focus merely marks the nonpresupposed nature of the information it carries.
- b. Certain types of constituents, universal quantifiers, *also*-phrases, and *even*-phrases, for example, cannot function as identificational foci; but the type of constituents that can function as information focus is not restricted.
- c. The identificational focus does, information focus does not, take scope.
- d. The identificational focus is moved to the specifier of a functional projection; information focus, however, does not involve any movement.
- e. The identificational focus is always coextensive with an XP available for operator movement, but information focus can be either smaller or larger.
- f. The identificational focus can be iterated, but information focus can project.

<sup>2</sup> (強)フェイズの主要部にならない非対格動詞および受動動詞の *v* と、(強)フェイズの主要部になる非能格動詞および能動他動詞の *v* は区別され、Chomsky(2001以降)は

表記上も後者を「v\*」のようにして前者と区別している。本論文でもこの2種類のvを仮定するが、表記については特に断らない限り統一して「v」を使用する。

<sup>3</sup> C-NSRはスペイン語／イタリア語等のロマンス語だけでなく英語にも適用される。更に、Zubizarretaは、英語やドイツ語等のゲルマン語には(i)の選択駆動核強勢規則が適用されるとしている。

(i) Selection-Driven NSR (S-NSR):

Given two sister categories  $C_i$  and  $C_j$ , if  $C_i$  and  $C_j$  are selectionally ordered, the one lower in the selectional ordering is more prominent.

Zubizarretaはこれを「モジュール化された核強勢規則」と称している。

<sup>4</sup> Zubizarreta(1998)は英語やドイツ語だけでなく、フランス語についても脱焦点化された構成素(あるいは照応形)が韻律的に不可視になるとしている。ただし、英語では主語も焦点でない場合には韻律的に不可視であるが、フランス語では異なるとされる。

<sup>5</sup> Moro(2000)の動的反対称性は、Kayne(1994)の反対称性理論に対する修正を試みたものである。Kayneは、基底においては如何なる言語でも指定部-主要部-補部の基本語順を取り、それと異なる表層語順には常に左方移動が関与していると主張する。これに対し、Moroは基底において基本語順を破っていても、知覚運動機構の要求から必要とされない限り、移動は適用されないとする。つまり、対称的な階層関係が語順の決定を妨げる場合にのみ、それを解消するため移動が適用される。

<sup>6</sup> Chomskyによれば、これはかつての指定部・主要部一致であるとされる。しかし、指定部という概念自体が存在しないとすれば、この見解は整合性を欠いていると言わざるを得ない。

<sup>7</sup> スペイン語／イタリア語では動詞がTまで移動するので、主要部vは(TP転送前の段階で)vP内にコピーを残すことになるが、vPフェイズ内の順序付けが行われるまではvはvP内に音韻的に空でない状態で留まっているとも考えられる。wanna縮約の際のwhコピーを取れば、移動のコピーが音韻的に全く空というわけではないとも考えられる。

<sup>8</sup> Rizziは以下のような規準の一般的形式化を試みている。

(i)  $XP_F$  and  $X_F$  must be in a Spec-head configuration, for  $F = Q, \text{Top}, \text{Foc}, R, \dots$

Fは問題となる作用域・談話解釈素性で、Q(疑問)、Top(話題)、Foc(焦点)、R(関係詞)などが考えられている。

<sup>9</sup> 数量詞の作用域については、Akahane(2008)でも論じているように数量詞の不可視的な移動(繰上げ、繰下げ)の可能性も考えられるが、本論文では論ずることはしない。

<sup>10</sup> よく知られているように、口語のフランス語wh疑問文ではwhの節頭への移動は



あくまでも随意的である。ただし、標準方言においては間接疑問文で *wh* 移動が義務的となる。

- (i) Je (ne) sais pas où c'est.  
I (ne) know not where it is  
'I don't know where it is.'

これは、Rizzi(1990a)などが述べているように、疑問文を補部を取る主節動詞の選択を充たすため、補文は CP 極辺に *wh* を持つことが必要となるためである。また、文を作用域とする *wh* 付加詞 *pourquoi* が(ii)のように文末に生起しないという事実がある。

- (ii) \*Tu es parti pourquoi?  
you are left why  
'Why did you left?'

これも Rizzi(1990b)が論ずる通り、*pourquoi* は TP を C-統御する CP 極辺に基底生成されると考えられる。ついでながら、*pourquoi* に対する英語の *why* についても同主旨の指摘が Bromberger(1987)によって為されている。

<sup>11</sup> Coomans(1989)は、提示構文で主語の右方移動(後置)が起こるとすると、従来の分析に見られる主語の位置(TP 指定部)からの移動ではなく、VP 内からの移動であるとしている。

<sup>12</sup> 定形補文であれば CP を伴うので非文とはならないように思われる。実際に(i)のような例が報告されている。

- (i) I doubt [<sub>CP</sub> that there ran into the kitchen the big rats]. (Nakajima(1997))

(i)では提示の *there* 構文と思しき定形節が補文標識 *that* に導かれている。しかし、*there* が CP 極辺を占めているとすると、その前に補文標識が共起するのはなぜだろうか。Rizzi(1997)の分離 CP 仮説によれば、補文標識 C は語用・談話に関連した複数の機能範疇に分割され、(ii)のような階層構造が形成される。

- (ii) [<sub>ForceP</sub> FORCE [<sub>TopP</sub> TOP [<sub>ForceP</sub> FOC [<sub>FinP</sub> FIN [<sub>TP</sub> ...

補文標識 *that* はこの分離 CP 仮説の下では FORCE の位置を占めるとされるが、CP 階層中、*there* が TopP 指定部に併合されるとすれば、両者は(i)でのような順序で共起可能となる。文末に現れている従属節の外項 *the big rats* は定名詞句であるにも拘らず定性効果が現れていないのは、本文中でも触れた存在構文と異なる提示構文の特徴というふうに見ることができるかもしれない。

<sup>13</sup> 関連して、存在構文を基にした *wh* 疑問文が文法的であるのに対し、提示構文では容認度が低いとされる。

- (i) During which meeting did there arise a number of unsolved issues?  
(ii) ??Into which room did there come a room?

(Coopmans (1989))

この差もやはり、存在構文と提示構文において *there* が生起する構造的な位置が異なっており、前者では表層主語位置である TP 指定部に、後者では CP 極辺に生起することによって考えられる。(ii) が完全に非文でないのは、使用されている動詞が提示構文に典型的な非能格動詞でなく、存在構文に生起するような非対格動詞が用いられることに起因しているとも考えられる。

<sup>14</sup> 例えば、演算子による何らかの一致が NegP フェイズによって阻止される可能性がある (Akahane (2008) 参照)。提示構文の *there* が話題演算子とすると、*there* は文内にそれと意味的に矛盾しないような要素(「場所」や「経路」の項を含む事象に関連する事象変項 Ev 等)に対して探査をし、一致によって値を付与する。その際、NegP フェイズが介在すれば、Neg の補部は既に転送されて探査自体不可能となるため、一致も適用不可能になる。

(i) \*<sub>CP</sub> *there* [<sub>TP</sub> *there* [<sub>NegP</sub> Neg [<sub>VoiceP</sub> <Ev> Voice [<sub>VP</sub> DP<sub>EA</sub> V-V [<sub>VP</sub> *t<sub>v</sub>* PP]]]]]]]

なお、この分析においても存在構文との相違を説明する必要はあり、*there* (の移動の仕方) に関して何らかの仮定をしなければならない点では本文中の分析と変わらない。

<sup>15</sup> 興味深いことに、(i) についても (74b) の解釈があるようである。

(i) A boy has danced.

Zubizarreta のようにモジュール化された核強勢規則 (注 3 参照) を設けることをしないとすると、本論文の分析からはこのような中和がなぜ起こるのか、そもそも広い焦点解釈が狭い焦点解釈とどのように区別されるのかといった問題が解決されずに残される。ただ、VoiceP の外に取り出された要素が焦点を担うことは、同定焦点でない限り、あくまでも有標的なものと見るべきであろう。

<sup>16</sup> 障壁の概念については、ミニマリスト・プログラムにおいても次の引用に見られるように肯定的な見解がある。

Though varieties of government would be “imperfections,” to be avoided if possible, the closer-to-primitive notion of L-making should pass muster, hence also notions of barrier that are based on nothing more than L-making. (Chomsky (2000))

## 参考文献

Aissen, Judith (1975) “Presentational-*there* insertion: a cyclic root transformation,” *Papers*

- from the Eleventh Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 1-14.
- Akahane, Hitoshi (2006) "Inner islands: a minimalist account," *English Linguistics* 23, 315-346.
- Akahane, Hitoshi (2008) "Intervention effects in covert movement constructions," 『言語研究』 133, 1-29.
- Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (2001) "The subject-in-situ generalization and the role of case in driving computations," *Linguistic Inquiry* 32, 193-231.
- Baltin, Mark (2012) "Deletion versus pro-forms: an overly simple dichotomy?," *Natural Language and Linguistic Theory* 30, 381-423.
- Belletti, Adriana and Ur Shlonsky (1995) "The order of verbal complements: a comparative study," *Natural Language and Linguistic Theory* 13, 489-526.
- Bošković, Željko (2014) "Now I'm a phase, now I'm not a phase: on the variability of phases with extraction and ellipsis," *Linguistic Inquiry* 45, 27-89.
- Bromberger, Sylvain (1987) "What we don't know when we don't know why," in Nicholas Rescher (ed.) *Scientific Inquiry in Philosophical Perspective*. The University Press of America, Lanham.
- Chomsky, Noam (1995) "Categories and Transformations," *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA, 219-394.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist inquiries: the framework," in Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. MIT Press, Cambridge, MA, 89-155.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," in Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*. MIT Press, Cambridge, MA, 1-52.
- Chomsky, Noam (2005) "Three factors in language design," *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.
- Chomsky, Noam (2008) "On phases," in Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria-Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*. MIT Press, Cambridge, MA, 133-166.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, New York.
- Collins, Chris (2002) "Eliminating labels," in Samuel Epstein and Daniel Seely (eds.), *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*. Blackwell, Malden, MA, 42-64.
- Collins, Chris (2005) "A smuggling approach to the passive in English," *Syntax* 8, 81-120.

- Coopmans, Peter (1989) "Where stylistic and syntactic processes meet: locative inversion in English," *Language* 65, 728-751.
- É. Kiss, Katalin (1998) "Identificational focus versus information focus," *Language* 74, 245-273.
- Epstein, Samuel, Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely (2012) "Structure building that can't be," in Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala (eds.) *Ways of Structure Building*. Oxford University Press, Oxford, 253-270.
- Horvath, Julia (2000) "Interfaces vs. the computational system in the syntax of focus," in Hans Bennis, Martin Everaert and Eric Reuland (eds.) *Interface Strategies*. Royal Netherland's Academy of Arts and Sciences, Amsterdam, 183-207.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Koopman, Hilda (2000) "The spec head configuration," in *The Syntax of Specifiers and Heads: Collected Essays of Hilda J. Koopman*. Routledge, London, 331-365.
- Larson, Richard (1989) "Light predicate raising," *MIT Lexicon Project Working Papers* 27.
- López, Luis (2009) *A Derivational Syntax for Information Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. Croom Helm, London.
- Merchant, Jason (2013) "Voice and ellipsis," *Linguistic Inquiry* 44, 77-108.
- Milsark Gary (1974) *Existential sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Moro, Andrea (2000) *Dynamic Antisymmetry*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Nakajima, Heizo (1997) "A generativist view of the cognitive analysis of raising," in Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba (eds.) *Studies in English Linguistics*. Taishukan, Tokyo, 474-491.
- Newmeyer, Frederick (1987) "Presentational there-insertion and the notions 'root transformation' and 'stylistic rule'," *Papers from the Twenty-Third Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 295-308.
- Rizzi, Luigi (1990a) "Speculations on verb second," in Joan Mascaró and Nespor Marina (eds.) *Grammar in Progress: GLOW Essays for Henk van Riemsdijk*. Foris, Dordrecht, 375-386.

- Rizzi, Luigi (1990b) *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1997) "The fine structure of the left periphery," in Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*. Kluwer, Dordrecht, 281-337.
- Rizzi, Luigi (2010) "On some properties of criterial freezing," in E. Phoevos Panagiotidis (ed.) *The Complementizer Phrase: Subjects and Operators*. Oxford University Press, Oxford, 17-32.
- Rochemont, Michael and Peter Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Ross, John (1967) Constraints on variables in syntax, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Ross, John (1984) "Inner Islands," *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 258-265.
- Rouveret, Alain (2012) "VP ellipsis, phases and the syntax of morphology," *Natural Language and Linguistic Theory* 30, 897-963.
- Safir, Kenneth (1985) *Syntactic Chains*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Schmerling, Susan (1976) *Aspects of English Sentence Stress*. University of Texas Press, Austin.
- Sportiche, Dominique (1996) "Clitic constructions," in Laurie Zaring and Johan Rooryck (eds.) *Phrase Structure and the Lexicon*. Kluwer, Dordrecht, 213-276.
- Stowell, Tim (1981) On the origins of phrase structure, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Zubizarreta, Maria (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*. MIT Press, Cambridge, MA.